

バラク・オバマ氏が新米大統領として、国民の期待を背に華々しく船出しました。ニューヨーク・タイムズ紙コラムニストのデービッド・ブルックス氏によると「演説の個々の言葉より、オバマ氏の映像とそれを取り巻く群衆の感情がより鮮明に印象に残った。」という感じだったようです。

オバマ米大統領の就任演説は、候補者としての決め言葉だった『チェンジ』と『夢』を封印、代わりに合衆国憲法に象徴される、法の支配や人権といった建国の理想への回帰と、苦難の下での責任や義務をもっぱら訴えたことで、多くの聴衆も以上のような印象をもったそうです。

建国の理想への回帰と言えば、福沢諭吉訳に「アメリカ独立宣言」があります。

『チェンジ』と『夢』に関しては、千七百七十六年第七月四日亜米利加十三州の独立ノ檄文の中でも、

「天ノ人ヲ生ズル八億兆皆（みな）同一轍ニテ、之二附与スルニ動カス可カラザルノ通義ヲ以テス。即（すなわ）チ其通義トハ人ノ自カラ生命ヲ保シ自由ヲ求メ幸福ヲ祈ルノ類ニテ、他ヨリ之ヲ如何トモス可ラザルモノナリ。人間（じんかん）ニ政府ヲ立（たつ）ル所以ハ、此通義ヲ固クスルタメノ趣旨ニテ、政府タランモノハ其臣民ニ満足ヲ得セシメ初（はじめ）テ真ニ權威アルト云フベシ。政府ノ処置、此趣旨ニ戻（もと）ルトキハ、」

の行に続き、

「則（すなわ）之ヲ变革シ或ハ之ヲ倒シテ、更ニ此（この）大趣旨ニ基キ、人ノ安全幸福ヲ保ツベキ新政府ヲ立ルモ亦人民ノ通義ナリ。是レ余輩ノ弁論ヲ俟（ま）タズシテ明了ナルベシ。」

と唱っています。

オバマ新米大統領は、就任演説で、建国の理想に回帰することにより『チェンジ』と『夢』は当然のこととし、前政権のもとで、無責任にも垂れ流された、未曾有のアメリカ発の世界金融危機、国連を無視した単独主義によるイラク・アフガニスタン問題など、今、アメリカの抱えている諸難問を解決すると宣言しています。

その上で、実際に治政に責任を負うようになった立場として、米国再生に向けて「我々に今求められているのは、新たな『責任』の時代だ」として、米国民一人ひとりにも自覚を呼びかけています。

特に、米国で過去最大となる景気刺激策に関しては、本格的な減税を求める共和党との調整に難航しそうですが、既に、法案の一部が、議会の委員会レベルでは民主党主導で可決され始めるなど、大統領と与党民主党指導部は、即効性を狙って、2月中旬までに景気刺激策を次々と打ち出し始めました。

一方、日本はというと、自公政権は定額給付金と消費税実施時期で混乱し、国民の望む

『チェンジ』や『夢』には無頓着で、国民には「中福祉を求めれば中負担」と税金の無駄遣いをそのままにし、「新たな責任の時代だ」と国民だけに『責任』を求め、首相自身は『チェンジ（首相発言のブレ）』と『夢（官僚の渡り）』に浸っているようですが、国民との感覚とは大きく『ズレ』、正に『KY（国民感覚が読めない）』です。



<アメリカ独立宣言>

アメリカ独立戦争の結果、イギリス（グレートブリテン王国）によって統治されていた13の植民地が、独立したことを宣言する文書で、1776年7月4日の大陸会議によって採択された。

起草はトーマス・ジェファソン(1743-1826)らで、ジョン・ロック(1632-1704)の政治思想(市民政府二論)が背景にあり、自然権(「人間は生まれながらにして自由かつ平等な権利をもっている」という考え方)・社会契約(国家の最高権力は人民にあり、国家はその受託者にすぎない)・革命権(国家の代表者が信託に反して自然権を侵害した場合は、人民がこれに抵抗する権利)が内容に含まれている。

この独立宣言は民主主義の基本原則となるもので、フランス人権宣言の模範となった。

しかし、先住民のインディアンや黒人(奴隷)に対する配慮はなく、白人の独立(人権)宣言といわなければならない。

7月4日はアメリカ合衆国の独立記念日として毎年盛大に祝われる。



「独立宣言への署名」(トランバル、画)

<デービッド・ブルックス (1916-) >

コラムニスト、コメンテータ。シカゴ大卒。

「ザ・ウィークリー・スタンダード」誌編集者。「ニューズ・ウィーク」誌寄稿家。テレビのニュース解説者としても有名な存在。

「ニューヨーク・タイムズ」、「ワシントン・ポスト」など、高級紙の常連執筆者でもある。



リッチで優雅な生き方をする新上流階級の自由奔放なブルジョア・ボヘミアン (Bourgeois Bohemians) を描いた著書「Bobos in Paradise」で有名。ボボズ族という言葉も登場した。

春秋：「米大統領就任式」(1/21)

原子力空母とクルマと深紅のバラと。三題噺(ばなし)のようで恐縮だが、ちゃんと共通点がある。答えは「リンカーン」だ。10万トンの軍艦もフォードの高級車も、そして強烈な香りを放つ大輪の1品種も、かの米国大統領の名をいただいている。

地名や大通りの呼称となると、それこそ全米のいたるところにリンカーンがあるそうだ。学校の名にも少なくない。南北戦争で疲弊した国を統一に導き、奴隷解放を宣言した哲人への深い敬慕ゆえだろう。その偉大な指導者に自らを重ね合わせた初の黒人大統領、バラク・オバマ氏の刻む歴史がついに動き出した。

首都ワシントンの熱狂に世界も酔っている。就任式やパレードをこの目で、と集まった国民は200万。彼ならきっと経済危機から米国を甦(よみがえ)らせてくれる。戦争を終わらせてくれる。人種間の融和を進めてくれる。そんな「きっと」「くれる」が満ち満ちているようだ。大統領の最大の敵は過剰な期待かもしれない。

今年はちょうどリンカーン生誕から200年。新たな建国の夢を託されたオバマ氏だが前途の陰しきは並大抵ではない。リンカーンの名を冠した空母がテロとの戦いを、フォード車が経済の混迷を象徴し、多難な日々を告げているのだろうか。ならば真っ赤なバラには希望を見いだしたい。花言葉は「情熱」である。

<エイブラハム・リンカーン (1809- 1865) >

第16代アメリカ合衆国大統領。初の共和党所属大統領。任期中に暗殺された初めての大統領。ケンタッキー州ハーディン郡(現在はラルー郡)生まれ。

偉大な解放者 (the Great Emancipator) 奴隷解放の父と呼ばれた。

リンカーンは奴隷制に反対していたため、彼が大統領に就任したことでアメリカ合衆国は奴隷制を維持したい南部と反対する北部で二分し、南北戦争を引き起こした。



リンカーンはその非常大権によって封鎖を宣言し、人身保護令状を保留、議会の認可無く支出を行って戦争を指揮し、北部連邦を勝利へ導いた。

1863年11月19日、ゲディスバーグ国立戦没者墓地の奉獻式場で述べた演説の一節にある「人民の人民による人民のための政治 (government of the people, by the people, for the people)」は有名。

天声人語：「大統領になったことが最大の仕事」(1/22)

モハメド・アリ氏の、選手時代の逸話を思い出した。まだカシアス・クレイの名前だった若いころ、ローマ五輪のボクシングで金メダルを獲得して意気揚々と帰郷した。

祝賀会のあと友人とレストランに行った。だが「黒人はお断りだ」と追い払われる。彼は怒りに震えてメダルを川に投げ捨てた。脚色された「伝説」と言われもするが、オバマ大統領の生まれたところに黒人が置かれていた、隠れもない現実である。

「つい60年ほど前はレストランで食事もさせてもらえなかったかもしれぬ父を持つ男がいま、あなた方の前に立っている」。黒人初の大統領は就任演説で述べた。奴隷制以来の過酷な差別を思えば、「大統領になったことが最大の仕事」の声が上がるのもうなずける。

それは、自由と平等をかかげた建国の理想の体現だった。だがその「大仕事」はきのうで終わり、今日からは容赦のない現実が待つ。膨らむ期待は、世界に満ちる不平、不満、不幸の裏返しにほかならない。さらに不安、不信、そして不穏。「不」が渦巻く荒海への、いわば船出である。

米国の大統領とは、多種多様な国民が、その時代に求める「かくあらねばならないアメリカ」の象徴といえる。首のすげかえといったお手軽な話ではない。そして期待の横で常に、失望が深々と口を開けている。

歴史的な就任式にはアリ氏の姿もあったそうだ。メダルの一件以来、人生をかけて差別と闘ってきた人である。人種問題を乗り越え、さらなる困難に旅立つオバマ氏に、大きなエールを送ったに違いない。

<モハメド・アリ(1942-)>

アフリカ系アメリカ人の元プロフェッショナルボクサー。ケンタッキー州ルイビル出身。本名カシアス・マーセラス・クレイ・ジュニア。イスラム教へ改宗したのを機に「モハメド・アリ」へ改名。

1960年のローマオリンピック・ライトヘビー級金メダリスト。

プロに転向するや無敗でヘビー級タイトルを獲得。その後は3度タイトル奪取に成功し通算19度の防衛を果たした。

引退後にパーキンソン病にかかり、長い闘病生活に入った。公の場に出る機会は大きく減ったが、難病の中でも社会に対してメッセージを発し続けるアリへの評価は、アメリカ



社会そのものの変化もあってむしろ高まっていった。

編集手帳：「初の黒人大統領」(1/22)

ロック・ハドソンが演じる白人の農場主はレストランで、ほかの客が人種を理由に店から追い払われるのを目にする。「もっと優しくしてやったらどうだ」。農場主は店主をたしなめ、殴り合いになった…。

往年の名画「ジャイアンツ」である。米国の新大統領バラク・オバマ氏が就任演説で触れた「レストランの食事」に、胸の熱くなる格闘シーンを想起した方もあったろう。

60年足らず前ならば地元のレストランで食事をさせてもらえなかったかも知れない父親をもつ男が今、最も神聖な宣誓をするためにあなた方の前に立つことができる。

初の黒人大統領を戴(いただ)き、米国全土が沸いている。首都を埋めた市民の人波は「繭玉」のようにも映った。テロの懸念が絶えないその人を幾重にも包み、その人が刻むだろう歴史の一章を守る繭玉である。

農場主は殴り合いに敗れた。店主は「お前さんには根負けしたよ」とばかりに、人種差別を是とする店の方針が書かれた額縁を壁から外し、倒れた農場主の胸もとに投げてよこした。深夜の演説を聴いた寝不足の頭で、ひとの心の壁から額縁が消える日を夢想する。

<ロック・ハドソン(1925-1985)>

俳優。イリノイ州出身。本名ロイ・ハロルド・シェラー Jr.

1948年『特攻戦闘機中隊』でデビュー。ハリウッド屈指の二枚目俳優としての地位を確立、『ジャイアンツ』(1956年)ではアカデミー賞にノミネートされ、『武器よさらば』(1957年)『お熱い出来事』(1964年)など多くの作品に出演、好評を博した。



大柄でありながら美しい外見で、まさに理想のアメリカ男性像として、存在感抜群の俳優であった。

1985年にAIDSに感染後、同性愛者であることを公にした。同年AIDSにより他界。著名人としては世界で最初のAIDS患者となった。

余禄：「厳寒の中の希望」(1/22)

ドイツ人はクリスマスにはビールを飲んでバカ騒ぎするだろう - - こんな見通しなしには米国は独立できなかったかもしれない。独立戦争で英軍に圧迫されたワシントン率いる大陸(たいりく)軍は、英軍のドイツ人傭兵(ようへい)部隊をクリスマスに急襲して形勢挽回(ばんかい)した。

直前の大陸軍は相次ぐ敗軍で数千まで兵を減らし、凍りつくデラウェア川の岸で野営し

た兵の中には靴すらない者もいた。歴史的奇襲の2日前、そこにいたある男はたき火の光の中でこう記した。「今こそ人間の魂にとっての試練の時だ」。

男は「コモン・センス」の著者トマス・ペイン、この時に書かれた「危機」という文章は大陸軍将兵を鼓舞し、独立戦争の勝利に貢献した。米独立革命史の泣かせどころといえるこの場面は、米国の苦難の時代には繰り返し思い起こされる。

だからオバマ新大統領が、その「危機」を引用して国民を鼓舞したのは、困難な時代の米国リーダーの正道だろう。「未来の世界で語られるようにしよう - - 厳寒の中、希望と美德しか生き残れなかった時、共通の脅威にさらされた都市や地方は進み出て、共に立ち上がったと」。

華麗な言葉のアクロバットを期待する声もあった就任演説である。だが耳に残ったのは国民に正面から現状の厳しさを説き、米国再生への「責任」を共に担うよう求める堅実な言葉だ。そこには過熱気味だった期待を冷却する狙いもある。

仏思想家トクビルは建国間もない米国人を見て「欠点を自ら矯正する力」を見抜いた。行き詰まった政治の大胆な路線転換も、建国の理想を再活性化することで可能となる米国の文明だ。その21世紀版は今、黒人大統領が扉を開いた。

<トマス・ペイン(1737-1809)>

社会思想家。イギリス・ノーフォーク・セットフォード出身。

1774年6月にロンドンでベンジャミン・フランクリンに紹介され、アメリカに移住。月刊誌『ペンシルヴェニア・マガジン』の編集主任となり、ペンシルヴェニア州議会に対し独立要求を突き付けている。



1776年フィラデルフィアでペインが執筆した政治パンフレット『コモン・センス』はアメリカ独立に影響を与えた。

独立宣言発布直後にペンシルヴェニア連隊に入隊、将軍付の秘書・副官となる。ワシントンにのり下り2年間働き、『危機(Crisis)』などの論文記事を出版し続けた。

1777年から1779年まで連邦議会外務委員会の書記をつとめ、賃金1690ドルうちの500ドルをワシントン軍に寄付、この例にならう者が続出した。

1780年にペンシルヴェニア州議会が可決した奴隷廃止法案の前文を書き、ペンシルヴェニア大学から名誉博士号を贈られている。

<アレクシス・ド・トクヴィル(1805-1859)>

政治思想家。初め裁判官、後に国会議員から内閣外務大臣まで務め、3つの国権(司法・行政・立法)全てに携わった政治家。

実家はノルマンディー地方の軍人・大地主という由緒ある家柄で、家族や親戚のほとんどがフランス革命の際に主な処刑され、リベラル思想について研究を行う。



その後ジャクソン大統領時代のアメリカに渡り、諸地方を見聞しては自由・平等を追求する新たな価値観をもとに生きる人々の様子を『アメリカの民主政治』として克明に記述。

1848年の二月革命の際には革命政府の議員となり、更に翌年にはバロー内閣の外相として対外問題の解決に尽力した。

1851年、ルイ・ナポレオン（後のナポレオン3世）のクーデターで逮捕され、政界を退く。

その後は著述及び研究に没頭する日々を送り、二月革命期を描いた『回想録』と『旧体制と大革命』を残した。